

視覚障害の子どもが 安心して学べる環境を作るために



～乳児編～

視覚障害を持つ乳児の多くは、自発的に行動をせず周囲を自由に動き回ろうとしません。この時期の行動は彼らの学習能力を発達させる上で重要な意味を持ちますので、大いに保護者のサポートが求められます。乳児が様々な体勢を取るようサポートしたり、彼らが自分の周囲に関心を示し安心して行動したりすることができる環境を作ってあげてください。



境界線で行動範囲を認知させる



乳児に視覚障害がある場合、安全に動き回れる範囲を自力で認知することが困難です。そのため、乳児の視力で捉えられる、あるいは触れて認識できる境界線を作り、彼らが『安全な場所』を認識できるようにしてあげる必要があります。乳児の視覚能力によりませんが、マットに濃い色の縁取りをしたり、マットの周辺にクッションや毛布で壁を作り乳児が触れて境界線が分かるようにします。周囲に対して警戒感を抱き、決して自発的に行動しようとしなない乳児には、常に境界線を認識させてあげることが求められます。たとえば保護者がひざに乗せている時でも、乳児が周囲に関心を示し自分から行動を起こそうとするまでは、必ず腕や足で乳児の体の回りを囲み、安心できる環境を作ってあげましょう。



周囲に関心をを持たせる



乳児が自分と周囲との違いを理解するには、物に触れたり周辺を探索したりすることが必要です。そのため、彼らの聴覚や嗅覚、触覚、視覚を刺激するものを常に乳児の近くに置き、手を伸ばせば届くようにします。対象物がころがってしまったり移動してしまったりしないよう固定してください。乳児は保護者の衣類や顔、手などにも大変興味を持ちますので自由に触らせてあげましょう。



様々な体勢を経験させる



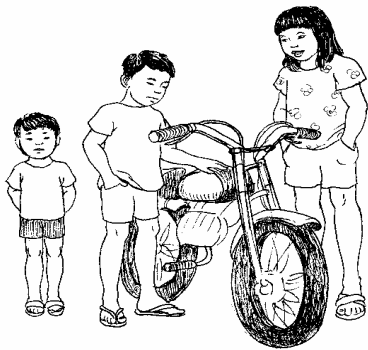
人は通常、バランスを保ちながら立ったり、物に手を伸ばす姿勢など、遊びながら自分の体について学んでいきます。乳児は、自分の体についての理解を日々深めていますので、保護者は彼らが様々な姿勢や体勢を経験できるようにサポートしてあげてください。



視覚障害の子どもにとって 新たな経験を受け入れやすい環境を作るためには

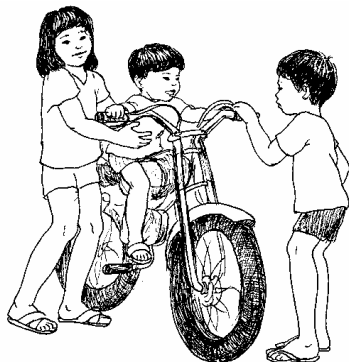
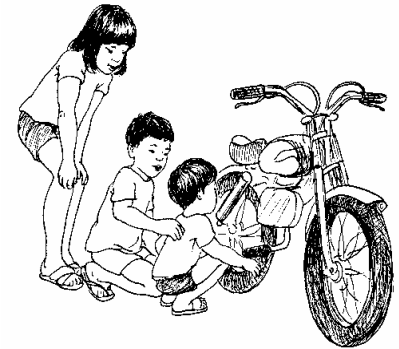


視覚障害を抱える子どもにとって、新しい物や出来事を経験する事は恐怖心をとまいません。そこで家族は、本人が何を恐いと感じているのか、またどう理解させてあげればよいのかを考える必要があります。ここでは、実際に私の家族が私に対しどう接したかをお話しましょう。



前日、父親が帰宅した時、家の外にこれまで聞いたことのない大きな音が聞こえました。私は恐くなり、その音から遠く離れた場所に静かに立っていました。興奮した兄と姉は私に父がオートバイを買ったのだと教えてくれましたが、オートバイが何かを知らなかった私は恐いと感じ、その近くには行きたくないと思いました。

兄は恐がる私に、大きな音はモーターの音で、タンクに水を送る時の音と同じだよと教えてくれました。私がオートバイの車輪やペダルに触れている間、兄はまだ恐がる私の近くに座り、オートバイが単に大きな自転車なのだと分かった時は少し安心しました。



彼らは私をオートバイに座らせ、オートバイのエンジン音を聞き、振動を体で感じるができるよう、父親にエンジンをスタートするよう頼みました。まだ少し恐く感じましたが、エキサイティングな経験でした。オートバイ全体がエンジン音とともにブルブル振動しているのを感じました。夕方、私たち3人は家の前を走りすぎるオートバイの数を一緒に数え、父がオートバイに乗せてくれる日が早く来ないかなと思いました。

注意点:

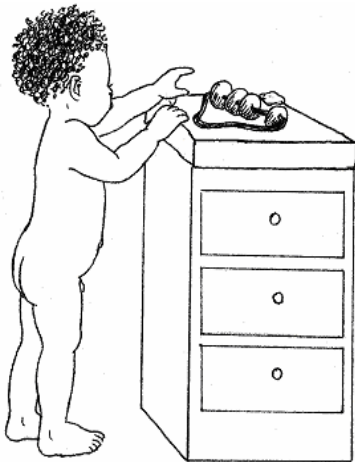
- 子どもが音を聞いたり、手で触れたりするようにサポートする。
- 新しい物について口頭で分かりやすく解説し、子どもが既に知っている物を例に挙げてそれとの違いを説明する。
- 彼らが行動するまでに時間が掛かったとしても家族は気長に待つ。子どもが自発的に興味を持って行動するのを見守り、決して強制しない。

視覚障害の子どもが 周りの世界を知るために



周囲に対し興味を抱かせる

子どもの身の回りには、彼らに出来ることがたくさんあります。しかし家族がサポートし、気づかせてあげない限り、視覚に障害を持つ子どもは理解できません。家族が本人に見せてあげなければ、子どもには自分の周りに何があるか分からないのです。音が聞こえても、家族がその音について話をしてあげなければ、子どもには理解できません。彼らが自分自身でやってみるのを躊躇していたら、子どもの手を優しく対象物に導いたり、家族が対象物に触れている際に子どもに手を握らせたりします。この際、無理に手を引いたりすると、二度と手に触れさせてくれなくなる可能性がありますので、決して強制してはいけません。



物を見つける方法を示す

身の回りの物がどこに保管されていて、どうすれば手に入れることができるのか、またそれらで何ができるのかを教えてあげてください。子どもが使うものを常に一定の場所に保管することで、必要な時に彼らが自分で取りに行くことが出来るようになります。視覚に障害があるため、家族は物事の成り行きすべてを子どもに示してあげることが必要です。単にオモチャを子どもの手に持たせるのではなく、そのオモチャはどこに置いてあって、どうやってそこから出すのかも見せてあげてください。そうすることで子ども自身がその方法を覚える事ができます。

自立をサポートする

物事のやり方を見せ、子どもが自力でできるようにサポートしましょう。やり方を見せる際には、子どもが覚えやすいように、簡単なやり方を何度も同じ動作でやってみせます。子どもの動作をサポートする時、もし即座に行動を起こさなかったとしても辛抱強く待ち、すぐに手を出さないようにしましょう。子どもは行動を起こす前に考えているだけかもしれません。自分でもできるようになってきたら、なるべく家族の手助けを減らしていくようにします。そうすることが子どもの早期自立へと繋がります。





子どもが使う物に変化を施したり、子どもがいる場所の環境を変えたりすることで、彼らの視覚能力を向上させることができます。子どもがなるべく自分の視力ですべての行動をするようサポートしてあげてください。日々の活動を彼ら自身の視力で行うようにすることは『ビジョン・トレーニング』を受けるよりも彼らの視覚能力の向上に効果があります。ここでは、女の子がビーズをヒモに通す作業を例にお話します。

物に変化を施す

適切なサイズを知る

まず、子どもの視覚能力を向上させるトレーニングをするためには、彼らに何が見えなければいけないのかを考えます。彼らが日常使う物すべてのサイズを変更する必要はないかもしれません。例えば、このトレーニングではビーズのサイズを大きくする、ビーズの穴だけを大きくする、ビーズを通すヒモを細くする、ヒモの先端だけを細くするなど、様々な工夫を施すことができます。

注意点：視覚障害を抱える子どもの中には、使用するものが小さいほどよく見える子どももいます。物を大きくすることが誰にでも効果的とは言えません。

色のコントラストを使う

彼女が実際に何を難しいと感じるのか見てみましょう。

- ビーズを見つけにくい場合は、明るい色のビーズをコントラストの強い色の布の上に置くと、より見つけやすくなります。
- ビーズの穴を見つけにくい場合は、穴と穴の周辺に、ビーズの色とコントラストの強い色を塗り、穴の場所を分かりやすくします。
- ヒモが見えにくい場合は、ヒモの先端に明るい色をつけてあげると識別しやすくなります。



環境に変化を施す

照明を変える

視覚障害を抱える子どもの中には、自室や学習する場所、遊び場の照明を変えるだけで、物がよく見えるようになる子もいます。昼光色の蛍光灯やネオンライト、黄色灯（白熱電球）など、照明の種類を変えてみてください。そして、子どもにとって物が見えやすくなったか、作業がしやすいように照明が当たっているか、部屋が明るくなったか確認してください。もし子どもが目を細めたりしていたら、彼らの目に反射する光の量が多すぎるのかもしれません。その場合には床やテーブルを暗い色にすると改善されます。

子どもの場所や使用する物の場所を変える

もし子どもが作業中に猫背になっていたら、より物が良く見えるように体勢を変えるか、背筋を伸ばし正しい姿勢にします。姿勢が悪いと、効率よく物を見たり作業を長時間続けたりすることができなくなります。テーブルやイスの高さや角度を変えると、子どもの姿勢が矯正され物をよりよく見ることができます。

整理整頓を心がける

子どもが作業をしたり遊んでいる時、周辺に置くものの数を最小限に抑えたり、無地のマットを床に広げたりするだけで、子どもが必要なものをより容易に見つけられるようになります。

活動に変化を施す

注意点：子どもに自分の力量を分からせるためにも、彼らが家族の助けを借りずに作業をしたり遊んだりすることは大切です。もし作業が難しいのなら簡略化してあげましょう。そうすることにより子どもが自分自身の力で作業を完了することができます。例えば、今回の作業の場合、ヒモの代わりに硬いワイヤーを使ったり、木製のブロックに固定された棒を使ったりすることで作業をより簡単なものに変化することが可能です。